



# 立神峡だより

## 今年も可愛い園児が親子で森の散歩を満喫

常葉保育所では毎年、この時期に立神峡公園を訪れ森の散歩を楽しみます。

今年も先月に引き続き、子育て奮闘中のお母さんとヨチヨチ歩き可愛い子どもたちが来て、ゆっくりとした足取りで散歩を楽しみました。今回は、雨の中、梅を収穫しましたが、今回はビワの収穫を体験しました。高枝切りばさみを使ってたくさんのビワを収穫し、楽しんでいました。毎年恒例となった森の散歩も、もっと多くの園児が参加して、幼児期の多感な時を自然に親しむ大切さをここ立神峡の公園で体験してもらえたらと思います。



## 不要になったバーベキューの網を有効活用

立神峡公園では、宿泊者がログハウスやロッジを利用してバーベキューを楽しみますが、その使用したバーベキューの網はいつも使い捨ての状態、年間で数百枚にもなります。

そこで、使った網の有効活用を考えてみました。公園では、年間の作業で竹や廃材など様々な部材が出ますがこれをチップという器材で粉碎して腐葉土にしています。ここに、カブトムシなどが産卵して卵を産み付けます。今までは、ふ化したカブトムシは自然に返していましたが、子どもたちに多くのカブトムシをプレゼントしたいという思いで考えた結果、網の有効活用でカブトムシを捕まえることにしました。夏休みを前にどれだけのカブトムシがふ化するかわかりませんが乞うご期待。



## ログハウスなどの時間貸しを利用して有意義な一時を

公園内にはログハウスが3棟・ロッジが2棟・里地屋敷が有ります。休みともなれば宿泊客で混雑しますが、意外と知られていないのが施設の時間貸しです。

特に、夏場は野外でバーベキューを楽しむグループでにぎやかですが、施設は宿泊客が出た後、清掃が終われば一時間1000円という格安の料金で、クーラーの効いた部屋で楽しくバーベキューを楽しむことができます。9日の日曜日には町内の親子連れが数組で利用してくれました。幼児も安心して過ごすことができ、楽しい一時を自然に囲まれたログハウスで過ごすのも、また格別です。



【お問い合わせ先】立神峡公園管理棟  
☎ 62-1543 FAX62-1546 (8:30~17:30 火曜定休日)

ホームページ  
<http://tategami-camp.com>

# 町民文化

## 短歌

我我の傘寿と喜寿に書き呉れし  
むすめが掛字「延年轉壽」

北野津 宮本 末秋

朝ぼらけ霧の晴れたる山際の  
氷川の里に南風渡り来ぬ

北野津 井田 道寛

小梅買う孫と歩いたスパーの

自動支拂い我れは戸惑う

西野津 古崎スエノ

風薫る美声衣の鮮む後に次ぐ

三分半の喉ならす

西野津 古崎 栄子

我家にも四代継ぐ幸わせを

孫がくれた愛つくしみ

南鹿野 尾崎 京子

兄嫁が私の著書を胸に抱き

嗚咽しながら言ったのは

「おばあちゃんへ見せたかった」

西上宮 村内 一誠

南風今年こそはと想いたる

母の願いを伝えよ北に

吉本 高瀬 道昭

玄関に吾娘とも想ふ教へ子に

頂きし花飾る母の日

吉本 高橋 澄子

美を競う咲しつづじの花景に

育てし人の心かさなり

上鹿島 前村 俊子

## 俳句

母の日や門辺にきしむ停車音

北野津 宮本 末秋

なめくじやものぐるほしきよひのあめ

北野津 井田 道寛

紫陽花の色とりどりに今日も無事

西野津 古崎スエノ

ザルの梅箸でつまんで孫想う

南鹿野 尾崎 京子

塩加減母のにほいの豆ごはん

町 香山菊童子

度たびのニュースの画面心痛なり

西野津 古崎 栄子

早植ゑの風にそよげる青田かな

吉本 高橋 澄子

水槽に甥の形見の目高かな

西上宮 村内 一誠

稲たちの輝く緑り大地なす

上鹿島 前村 俊子

## 詩

還暦古希とめでたく終えて

早くも卒寿の誕生迎ゆ

※梅雨空に、明るく咲く花(アジサイ)の舞台でカエル楽しく歌う

「ゲゲゲ」グワグワグワ

東上宮 H O

### 投稿について

・ 楷書で記入し、漢字には全て読みがなをふって投稿してください。  
・ 内容確認する場合がありますので電話番号を明記してください。  
・ 毎月8日必着

※遅れて投稿された場合掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。

### 投稿先

〒869-4814 氷川町島地642番地  
企画財政課 企画係 ☎52・5850

### 漱石と家族と「漱石山房の人々」

手探りで Derrin Memorial

法道寺 本田 花風

大江は「明治の精神」と「心」の淵に触れ難解に解説しました。

一方、作家、綿矢りさの「心」は、初めて読んだのは高校生の時、教科書で、自殺したKを先生が見つける場面に感銘を受けました。「もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横わる全生涯を物凄く照らししました」この迫力、忘れられなかった。

遺書の最後の一文も鮮やか。「私の秘密として、凡てを腹の中にしまつて置いてください」。ぱつぱり終わる。読み終えて、思わず「先生！」って心の中で叫びました。十九歳で芥川賞を取った彼女の若き日の感想である。

岩波文庫版の注釈担当 石崎等氏の言葉から。「門」は一九一〇年、朝日新聞文芸欄に連載された。連載を前にしても題名が出来ていない漱石は、編集助手の森田草平にこんなことを言ったという。「君一つ好い加減に名前をつけて、予告を出してくれ」森田は漱石門下の小宮豊隆と相談し、「ニーチェの著書『ツァラトゥストラはこう語つた』を開く。序文に「門」という言葉を見つけ、タイトルにしたという。漱石は門らしくないとこぼしたが、いかにタイトルと内容を結ぶか。漱石の手腕の見せどころでもあった。「作中に『門』を暗示する小さなエピソードが書き込まれています。そして結末近くで、見事に実現しています」と石崎さんは話す。